

資源循環システム「CO2削減」の講義評価アンケート返答版

臨時増刊号
 七月号
 第2号

新年度を迎えて早1ヶ月、皆さんも新しい学年に慣れてきた頃でしょう。資源循環システムコース（資源開発工学科）・教育システム改善委員会でも、4月から金子勝比古教授を新委員長に迎えて、新たな体制でスタートしています。本委員会は皆さんに提供する教育システムを継続的に改善する、という趣旨で設置されており、定期アンケートの実施によるカリキュラムや講義内容の分析と問題改善が主な活動となっています。



新委員長から一言

金子委員長

委員長は学生委員が担当することとなっていますので、この4月から私に交代しました。しかし、若くて教育に燃えている二人の委員は留任（留年？）ですので、昨年と同様に教育改善を目指して鋭意努力したいと考えています。なお、学生さんの場合はちゃんと勉強しないと留年したりするのですが、先生方の場合はちゃんと仕事をしておき、最近、大学の教育について考えるのですが、大学は「勉強させる」ところや「勉強させられる」ところではなく、「勉強する」ところの「はずです」よね。そして、教育改善はこのための環境整備であると・・・この原点から考えて行きたいと思っています。



原田委員



広吉委員

TEACHER OF THE YEAR 2006

「今日の講義はうまくできたぞ」と思えるのは、10回に1回行きます。これからもう「記憶に残る」講義を目指し、教育内容と教育方法の改善に努めてまいります。



「応用地質学」
 佐藤 努 先生

毎年のアンケートで「すばらしかった科目」として最も評価された科目の担当教員は、「Teacher of the Year」としてコースHPに掲載されています。2006年度のTeacher of the Yearは、応用地質学を担当された佐藤努先生です。「応用地質学」に寄せられたコメントには、「資料などがわかりやすくまとめであり、勉強しやすかった」「説明がわかりやすかった」「熱意があり、ついて行けた」などがありました。

学科への意見・要望 (アンケート結果)

H19 春のアンケートで寄せられた、コースへの要望や質問についてお答えします。より詳しいアンケートの結果は、結果の分析とともにコースHPに後日掲載する予定です。

Q TOEIC や TOEFL 対策になるような英語の講義を作って欲しい。外国語を必修にして欲しい。

A 全学教育の英語必修科目の壁を突き抜けてきた君！まだまだ勉強が足りないと感じているのかも知れませんね。また、最近、全学教育の英語は君の希望するような内容を含むように変更されていますので、きっとそれ以前の入学生であると思って回答します。北大の外国語教育は外国語教育センターが中心になって実施しており、英語を含む各種の語学教育プログラム（外国語特別講義）が用意されています。これは全北大関係者（教職員・大学院生・研究生を含む）を対象としたもので、学部学生も「外国語演習」、「外国語B演習」又は「外国語C」として受講できます。申し込みは各学期の開講期に行われ、定員になり次第締め切られるそうなので、外国語教育センターのホームページ (<http://www.hokudai.ac.jp/lang/>) や掲示板をこまめにチェックしてください。最後に、必修だから受講するのではなく、勉強したいから受講する、と言う姿勢を忘れずに。

Q もっと実習や社会に触れるような講義があればよい。

A 3年次コース選択科目として学外実習が、1・2年次には全学教育選択科目としてインターンシップA、Bが用意されています。これらの科目は、夏休み中の2週間程度の期間、工場や研究所などで実習し、学校で学んでいることが生産や研究の現場でどのように活用されているのかを理解し、学修計画や進路を考えるのに役立ててもらおうというものです。実習先選びから報告書作成、口頭発表まで、(担当教員の指導・助言はありますが) 皆さん自らの手で行うことになり、なかなかハードな科目ではあります。しかし、多くの先輩がこれを利用して地力をつけてきました。ぜひ皆さんも活用して下さい。また、我々のコースでは、通常の講義以外に、様々な分野で活躍されている方々（OB・OGも含む）をお招きしたセミナーや講演会、学術的な催しなどを、不定期に開催しています。これらの多くは学生無料ですので皆さんも気軽に参加できます。情報は資源の掲示板やホームページなどに掲載しますので積極的に参加して下さい。この手の催しでは懇親会などが設定されていることも多く、社会の一線で活躍されている方々と直接お話できる良い機会となります。

Q もう少し評価基準をあげてほしい。

A この意見は、おそらく「成績の評価をもっと厳しくしてほしい」との意味で書かれたものと思いますが、その逆の可能性もなくはないので、成績の評価基準について一教員が普段考えていることを述べます。成績評価は、講義毎に厳密に基準を定めて実施するように努めています。成績評価の基準を定めるとき、教員は2つのことを考えます。ひとつは、皆さんが卒業までに理解しておくべき学問的な内容、ふたつめは成績の分布です。前者に関してはいったん講義の内容を設定しまえばブレようもなく悩みは少ないのですが、後者に関しては悩ましい。通常、成績の分布は可～良付近にピークをもつ正規分布となることが理想的とされており、教員は問題の難度や配点などを工夫するように上層部から圧力をかけられます。このためはじめて講義を受け持ったときには「問題が簡単すぎるかな？クラス全員が100点とってしまったらどうしよう？」などと悩んだこともありましたが、そんな（うれしい？）事態にはついぞお目にかかったことはありませんので、近頃は安心(?)していました。しかし、つい先日、テストの成績が逆正規分布（0点付近と100点付近にピークがあり、中間的な点数の人数が少ない）になった例を先輩の教員に見せられて驚きました。やはり21世紀は何が起こってもおかしくない時代です！今年の皆さんが想定外の事態を引き起こしてくれるように期待しています！